

II インタビュー

ホフマン教授に、フイヒテにおける自然および言語の問題を問う

聞き手 木村 博

木村 ホフマン先生、本日は、ご多忙中にもかかわらず、インタビューの申し出にたいしてご快諾くださいますことありがとうございます。

今日は、とくに、フイヒテにおける自然や言語の問題についていろいろお聞きしたいと思っております。といいますのも、先生が『Fichte-Studien(フイヒテ研究)』にお書きになったフイヒテ自然哲学や言語論にかんするご論考⁽¹⁾を拝読し、とても興味深く感じたからです。日本では、フイヒテの自然・言語についての議論はそれほど活発とはいえませんが、先生の視点はこうした傾向に刺激を与えるものとおおいに期待しております。

I メディウムとしての自然

木村 先生は、フイヒテの自然をメディウム(Medium)として規定されています。こうした発想は、フイヒテ研究においてもじつにユニークなものと考えられます。これまでも、フイヒテ自然哲学の研究はラウト⁽²⁾をはじめとしていろいろなされていますが、自然をメディウムとして捉える構想はきわめて新しいもので、したがって、とても魅力的なものとなっているように思われます。ただ、このメディウムという概念は多義的なニュアンスをもっているようにみえます。むしろ、メディウムは、たんなる手段・道具といったものではないということにはたしかだと思えますが、それでも、たとえば「中間」「中心」「媒介」「媒体」あるいは「中間領域」「中間の場」といったさまざまな意味合いがあるともうけられます。そこで、まず、自然をメディウムとして捉える構想の由来、あるいはその背景にあるものについて、そして、フイヒテとの関連についてお聞きしたいと思います。先生の研究経歴も交え

てお話しただけませんかでしょうか。

ホフマン教授 ええ、分かりました。わたしがこうした構想をえるにいたったのは、自然概念についての大がかりな研究をおしてでした。この自然概念の研究はのちにわたしの大学教授資格取得論文となったものです。哲学的な自然論という意味で『哲学の生理学』という書物を著しました。そのサブタイトルが、哲学史を鏡とした自然概念の系統学、です。そのなかで、わたしは、自然哲学の本来の意味とは何かを示そうと試みました。というのも、自然哲学は自然科学と直接競合するわけではないからです。しかし、それでも、われわれは哲学者として自然について何事かを表明しなくてはなりません。しかも、真に哲学的にみて自然とは何かということの規定しなくてはなりません。われわれは哲学者として、自然科学にたいしてメタ反省をなすだけではなく、自然にかんして根源的に語らなくてはなりません。この点をわれわれは留意しておく必要があります。

わたしがこの仕事のなかで示そうとしたことは、自然哲学の歴史全体のなかにはある固有な歩みがある、

ということですが。つまり、自然をわれわれの語りかけの対象領域としてではなく、世界からの呼びかけ(Ausprechen)の仕方を示す次元として捉える、そうした歩みです。これは、いわば世界の具象性をまったく独自の光で照らしだすもの、というよりはむしろ、外的領域によるわれわれの被媒介性を表現するものです。

このコンテクストにおいて、わたしは、つぎの点を指摘しました。すなわち、フイヒテ自身をつぎのような著者の一人としてみなすことができるということですが。フイヒテは、自然をメデイウムとして、つまり、われわれと抽象的に対立しているものとしてではなく、たしかに対立はするのだけれど、しかしどうじにそのなかでわれわれが宿っているものとして、要するに、(最初にあなたがいわれたことに重なりますが)自己表現、そしてまた自己発見がそこで可能となるような、そうした領域、範囲として捉えているわけです。とりわけ、それは、フイヒテにおいて、身体論、人間の体との連関において重要です。これがもっとも重要なアスペクトです。

そして、『動物磁気療法にかんする日誌』(一八一三

年)を考慮に入れるとすれば、その『日誌』はいかにして自由に目覚めるかを熟考しています。自己自身の道を歩むこと、個人の地点について語っています。だから、そこに達することがとても重要です。つまり、そこにおいて、個体が、外面性を抜け出て、反省する個体として、したがって自由な個体としてみずからをみいだす、そうした地点に達することが重要です。ですから、『日誌』は、「自然」を死んだ対象として捉えてはいません。そのなかにわれわれが存在し、そこからわれわれが胎動する、そうしたエレメントとして捉えています。

だから、自然はわれわれにとってなにかまったく疎遠なものではありません。たしかに、自然は精神的なものではありませんし、われわれの意識の領域でもありません。精神的な認識でもありません。しかし、自然は、それとまったく別のものでもありません。自然は、それをおしてたとえば認識や自由が実現される、そうした領域なのです。自然の、こうした媒体ないし中間領域としてのメデイウムという意味が大切です。

たしかに、最初は、フィヒテもわたしの考察の一部

分でしかありませんでした。けれども、わたしは、フィヒテを重要な著者だと考えるようになりました。というのも、フィヒテは、たんに理論的なパースペクティブだけでなく、実践的パースペクティブから自然を押し込んでいるからです。人間の実践は、自然とつきあうことであつて、自然を支配することにあるではありません。たとえ、自然支配の考えがフィヒテのなかにあるとしても、それは理論的なパースペクティブからシェリングと論争する場合に高じてくるものだという点に留意しておく必要があります。自然は、第二の総体性として、つまり、何かしらのしかたでわれわれの認識やわれわれの自由の領域と対立し競合する領域として捉えられるべきではありません。そうした領域は低次の段階です。これにたいし、われわれがそのなかで生きる、そうした領域といったものがあります。それが中間としての自然です。自然は生命をも可能にします。だから、自然は、個体が他の個体と出会うことを可能とします。自然はたんなる限界ではなく、変動可能な境界なのです。

以上が、一般的な背景、そして、フィヒテとのかか

わりです。

2 自然をその固有な価値において捉える可能性

木村 さらに先生にお聞きしたいことがあります。先生がいまいわれた構想からみて、ファイヒテが自然をその固有の価値において捉えていると評価できますか。自然をメデイウムとして、つまり、そこにおいてわれわれが生きる領域として捉える観点からいえば、自然を外的対象とみることは、道具としてみることですね。ホフマン教授 ええ、ただ客観として、死んだ客観としてみることです。たとえば、科学者が対象を顕微鏡で観察するように。

木村 ですから、先生の構想によれば、そうわたしは受けとめているのですが、ファイヒテにおける自然はその固有の価値において認識されなくてはならない、ということになりますね。たとえば、ご論考においても、『道徳論の体系』（一七九八年）の「自然は自己自身を規定する」という箇所に着目し、自然の「自己規

定」を強調されています。

ホフマン教授 ええ、そうです。わたしは、ご指摘のようにそれが実践的パースペクティブにおいて可能となると考えます。

たしかに、自然を理論的に捉えることはできません。ファイヒテはつぎのような二つの側面をよく知っています。すなわち、客観的に使用されている自然、そして、中間として経験される自然。たとえば、理論哲学、つまりファイヒテの知識学の理論的側面の全プログラムは、当然のことながら、つぎの点にあります。すなわち、われわれは理論的認識、したがって、世界認識がつぎの意味で可能である、ということなのです。われわれは傾向としてあるいは原則的に自然をも解明できるのです。理論的な概念基礎づけという点で。ファイヒテにおいて、自然の背後にいかなる物自体もありません。自然にかんするわれわれの客観的な表象の規則的な秩序（コスモス）があるだけです。その秩序はカテゴリー論において、後期知識学、たとえば一八一二年の『超越論的論理学』を想定していえば、こうした一連のカテゴリーを、ファイヒテは、それによってわれわれが自然を完

全に世界対象として把握しうる、そうしたカテゴリーとして展開しています。これが自然にかんする理論的な見解です。この文脈において、フィヒテは、シエリングが自然そのものを自律的な理念、あるいは、独立した理念、われわれにたいして独立して現れる理念の形態として捉えるとき、シエリングを誤りとしています。そこに、自然の純粹な意味での超越論哲学があります。自然の解釈は、われわれが自然についてもっている超越論的な構成に解消されます。

しかし、パースペクティヴが理論的な世界認識から、実践的な自己認識へと変わることによってはじめて、別の自然概念が現れます。そのとき、自然は、われわれが客観を形成するようになした主題化するものではありません。そうではなく、この連関で捉えられる自然は、われわれがそう名づけたもの、すなわち、メデイウムです。つまり、そこからわれわれが精神的に浮上する、あるいは、そのなかでわれわれが落ちついている、いいかえれば、そこにおいて精神的に共同する世界を築くことができる、そうしたエレメントなのです。

ドイツ語には、身体 (Leib) と物体 (Körper) という二つの語があります。物体は、いわば、客観的な世界対象です。延長として把握されたデカルト的な物体です。これにたいして、身体は、いわば、物体の実践的な側面です。わたしは身体をとおして自然に住みついているのです。ですから、自然のなかで営むひとはだれでも、「直接的な志向」で自然性を経験しているのではなく、間接的な態度で自然経験をするので。この点を主題化したことに、わたしの考えによれば、フィヒテの偉大な功績があります。こうした把握を明確に示したものとして、実践哲学、とりわけ道徳哲学（それが個人の自我を問題にするかぎり）と法哲学（それが個人主体の関係を考えなくてはならないかぎり）を挙げることができます。しかし、われわれは、哲学のこうした二つの主題領域を、もしわれわれがただ理論的にのみ世界をみているだけであれば、十分に仕上げることができません。われわれは、実践的に、自然のこうした別の面をいいあらわすことができるのでなければなりません。

木村 その線上において、自然をその固有の価値に

おいて捉えることが可能となる、ということですね。

3 隠れることによつて顕わになる自然の弁証法

木村 これは小さな質問ですが、先生は自然にかん
 するご論考でつぎのように書かれています。「自然の実
 現は、自由の超感性的な世界が現出することによつて
 消失することであり、ただこうした現出の生き生きと
 した輝きのなかで隠れることによつて顕わになること
 である」と。

ホフマン教授 ええ、そのとおりです。

木村 この「隠れることによつて顕わになる」とい
 う表現を、できれば事例を挙げて説明していただけま
 せんか。

ホフマン教授 ええ、この論文では圧縮して述べて
 いますが、ほんとうはよりおおきなコンテキストのな
 かで考えなくてはなりませんので、その点を話してみ
 たいと思います。

まず、簡単な事例を挙げるとすれば、言語を想定し
 てよいでしょう。知的にありありと思ひ浮かべること

ができる点に言語の意義があるといえますが、しかし、
 言語にはたえずそれと異なるものがあります。

木村 異なるもの？ 顕わにならないものというこ
 とでしょうか？

ホフマン教授 ええ、いいかえれば他性といったも
 のです。つまり、知的に織り込むことができないもの
 があります。そのかぎり、意味の欠落というものが、
 ある一定の役割をもつて、意味が臨在していることと
 たえず結びついているのです。一方は他方なくしては
 ありえません。この意味の不在——臨在なくしては、い
 わばトータルな精神の現在を言語によつて手に入れる
 ことはできません。

あるいは、ヘーゲルもふれているところですが、別
 の例を挙げてこの問題への応用を試みましょう。わた
 し語る物理的な音、わたしが言う語は、あなたにあ
 る意味を示しますし、また、わたし自身にもある知的
 な意味と意義を示します。けれども、そうした音とし
 ての語はわたしがしゃべるや否や消えてしまします。
 わたしの語りの現前性、この現在の今はただちに消失
 します。時間とともに、いわばこうした音の記憶は後

退します。けれども、これはいつそう大きな連関をもつています。わたしがいいたいのは、こうした不在による臨在が現象の弁証法全体に当てはまる、ということとです。現象の弁証法は、もしそういつてよければ、じつさい存在と無の結合の弁証法です。現象は、たえず、こうした存在と無の混合、通過領域です。あるいは、フィヒテ的にいえば自我と非我、メタファーを援用していえば光と闇とが互いのうちにずらし込まれていること、なのです。現象はたえず存在と無の弁証法的な移行および結合をなしています。その場合、物理的なもの・物質的なものあるいは客観的なものはたえず主観的なものや自由なるものになりたいとする運動をみずからに含んでおり、したがってこれに反発します。現前性はどうじに消失すべきものです。現在が廃棄され過去になり行くことによって、ある別なものが立ち入ることができません。

以上は、像的なものの領域全体にも当てはまります。像のなかにもこの不在と臨在の弁証法があります。と、いうのも、あなたのご論考「見ることと言ふこと」⁽³⁾にわたしは興味津々だからです。副題が「見るはみずか

らの根源が語り出すのを見る」となっています。これは不在—臨在の関係を表しているといえます。つまり、根源とは不在による臨在にほかなりません。根源はそのままでは不在であるとしても、それにもかかわらず、現象のうちに現れます。像はこうした運動の表現です。不在になり行く弁証法は、どうじに、あるあたらしい臨在をもたらしめます。

木村 ええ、フィヒテも、『超越論的論理学』のなかで「自然学」についてふれ、自然がみずからの根源を隠蔽するものであり、そうした「自然における内的生命についての説明しがたい概念」を可視的にするのが像だといっています。ですから、先生のいわれる意味での弁証法はよく分かります。

4 自然の「中間の場」としてのメデイウム

木村 さきほど言及された「見ること」について、さらに質問を加えたいと思います。ご承知のように、見るといふ概念は、後期フィヒテにおいてとりわけ重要な位置を占めています。たしかに、見るのは「わた

し」ですから、わたしという見る行為の主体は不可欠です。しかしながら、だからといってそれがすべてではありません。わたしの見る行為そのものが可視性の条件たとえば光に負っているからです。けれども、それで終了となるほど問題は単純ではありません。というのも、光がわたしの可視性の形式に入ることなくしては、そもそも光をわたしの可視性の根拠として了解することはできないからです。この点を確認したうえで、さらにつきの点に留意しておく必要があります。すなわち、見るというのは、みずからに現れている絶対性を、そうした絶対性に導かれることによつて見るのだ、ということなのです。ですから、わたしの見る行為とこれを超えている光の絶対性とは不可分であり、一方を他方に還元できません。こうした不可分性を、先生のメデイウムとしての自然という構想が、とりわけその中間ないし媒介の面から提示しているように思えますが、いかがでしょうか。

ホフマン教授　そうですね、いまあなたがいわれたことでわたしがすぐ想起したのは、プラトンの「太陽の比喩」です。プラトンは、太陽の比喩を主観―客観

関係とのつながりで述べています。つまり、われわれの見る行為が太陽の光に由来することを述べるとどうじに、われわれの視覚が叡智的太陽の子どもであると述べています。この叡智的太陽は、フィヒテでいえば、絶対的な光であり、そのもとには主観と客観の差異はありません。こうした観念論と实在論との根本的な対立とその乗り越えといった議論は、さらに、一八〇四年の知識学をわたしに思い起こさせます。そこでは、パースペクティヴの転換がいられています。ですから、限定された観点からいえば、わたしは一方では太陽を見る根拠です。というのも、可視性の意味、次元は、わたしの知のはたらきに依存しているからです。しかし、他方では、实在論が正当にもわたしの太陽を見る行為をわたしの見る能力に依存しない可視性に関係づけています。そうした対立のさなかにあつて、一八〇四年の知識学は、たんなる实在論やたんなる観念論を超えた絶対的な認識根拠つまり絶対的の光があることを示します。

木村　ええ、おっしゃるとおりだと思いますが、わたしがいいたかったことは、わたしの見る行為とそれ

を超えたものとの接点、ということですが。つまり、その接点こそ像つまり自然の像であり、この自然の像が先生のいうメデイウムとしての自然ではないか、ということですが。

ホフマン教授 そのとおりです。自然をとおして観智的なものは現れますが、しかし、それはどこまでもわれわれの形像作用と相即しています。像は、われわれの可視性の形式、了解可能性の形式です。メデイウムとしての自然は、そこにおいて観智的なものが現れ、そこにおいてわれわれが了解する、そうした中間の場です。

5 アンビヴァレンツ（両義性）としての自然

木村 日本では、フィヒテは自然を支配の対象としてしか捉えていない、とみなされるのが往々にしてあります。ご論考のなかで先生は、フィヒテが自然を否定的にみている面だけでなく、さらに、肯定的にみている面をも書かれています。こうした両側面を、どのような観点から書かれていますでしょうか。

ホフマン教授 ええ、わたしは、支配の対象として自然をとらえる解釈を一面的だと考えます。ですから、わたしは、自然にかんする論文で、それとは別の側面を示そうとしたのです。ここドイツにおいてもまた、かつてはたいいていの場合つぎのように理解されてきました。すなわち、フィヒテ哲学には自然がない、フィヒテは自然を捨象しているだけだ、といったフィヒテの自然理解にたいする拒絶がありました。しかし、それがすべてなのではありません。

ただ、わたしは、フィヒテが自然にかんして独自の関心を一貫してもつていたわけではないとみています。つまり、フィヒテは、その時々において限定されたパースペクティヴから自然をあつかい、その時々におこなった自然研究に応じて異なった観点を提示したのだと思います。たとえば、知識学が構成哲学のプログラムを追究するものであるかぎり、知識学の観点から世界の客観的構成の論理が引きだされ、自然にたいする否定的な観点が優勢となります。けれども、実践哲学の観点からは、さきにふれた『動物磁気療法にかんする日誌』との関連でいえば、自然にたいする別の視点

つまり肯定的な観点がでてきます。ですから、そうした観点はフィヒテのパスpekティブに依存している、といたいと思います。そして、われわれがフィヒテ研究者としてなすべきことは、そうした弁証法がどうしてフィヒテ自身にあるのかを理解することです。わたしがいいたいのは、こうした弁証法が自然を評価する場合に自然そのもののアンビヴァレンツを映しだしている、ということ。弁証法は、自然が一義的な対象ではなく、メデイウムとしての、中間的な、媒体的な、両義的な意味をもつという事実の帰結です。あるいは、自然が隠れることによって顕わになるものだという事実の帰結です。こうした不在による臨在こそ、すでにいいましたように、理論的なパスpekティブにおいては、自然から否定的に距離をとること、どうじに、実践的なパスpekティブにおいては、自然におけるこうした自己実現する知的といつてよいような契機にたいする熱いまなざしがあることの根拠なのです。

自然が像特性をもつものとして認識され、自己形成する像としてみなされているとき、重要になってくる

ものは、形成衝動 (Bildungstrieb) です。これは、フィヒテにおいて、すでに一七九八年の道徳論の時期に登場しています。形成衝動という概念は、生理学や生物学に由来するものですが、ブルーメンバッハ⁴は、形成衝動を使って、有機的なものの成長法則を記述しています。どうして胚から成長して人間や動物ができるのかといえ、そこに形成衝動があるからだといわけです。フィヒテは、この形成衝動の概念を取りあげ受けついでいます。つまり、形成衝動に精神的な意味、とりわけ形成ないし陶冶の意味を込めているのです。形成はもともと自然の事象ですが、フィヒテでは、知的な側面が顕わになるわけです。像は、われわれが芸術のもとで理解しているもの、認識に関係しているものとなります。そうして、メデイウムとしての自然のなかで、像の無意識的な形成と像の自己認識的な形成とが架橋されるのです。

6 フィヒテ自然哲学の現代的可能性

木村 自然の問題にかんして最後の質問をお許しく

ださい。先生は、ご論考の最後のところで、フィヒテにおいて自然が自由の概念に開かれていることを指摘し、フィヒテの自然概念の現代的意義を強調されています。そこでお聞きしたいのですが、フィヒテにおける自然概念は、現代の環境問題においても固有の意義をもっているとお考えでしょうか。

ホフマン教授 ええ、そうです。自然のこうしたメデイウムとしての意味をまざまざと思い浮かべ、追想するならば、つぎの点を指摘できるでしょう。つまり、メデイウムとしての自然が地上での人間の生活一般を実現する可能性の条件である、ということなのです。これと反対に、自然をただ理論的に対象化するだけで、自然を無に解消するならば、それは一面的でしかありません。われわれの精神による限定構成の形式に完全に依存している客観として捉えるような、そうした自然の概念は、自然を無に解消するものです。その場合、われわれが自然を理論化するものであるだけでなく、自然のなかで自然とともに生きている存在だということとがすっかり見落とされているのです。こうした理論的なパースペクティヴの一面性ないし限界を暴露する

ものが実践的なパースペクティヴにほかなりません。この点がとくに大事だとわたしは考えます。美的感覚との連関でも、自然が像特性をもっていることを忘れてはなりません。自然は、たしかに像としては滞留するものですが、しかしこの滞留においてみずから指標となり、さまざまな目的や目標とのきずなを形成します。自然はまさにわれわれの認識の像的な現在化です。われわれが自然のこうした次元にふたたび敏感になるならば、それは環境問題にとって重要な意義をもつでしょう。というのも、現代の環境問題はまさに自然を無に帰するところにあるからです。自然は経験されなくてはなりません。

木村 その意味で、フィヒテの自然が現代的な重要性をもつわけですね。

7 フィヒテ言語論研究の背景にあるもの

木村 さて、つぎに、言語の問題についてお聞きしたいと思います。言語にかんするご論考もとても興味深いものでしたので、やはりここでもまた、まずその

背景といったものからお話しただけだと思えます。

ホフマン教授 ええ、わたしは、かなり早い時期から言語哲学を研究してきました。わたしの指導教授は、ここボン大学のヨーゼフ・ジーモンです。かれは言語哲学にかんする多くの仕事をしており、言語哲学の本も執筆しています。わたしは、とりわけジーモンの指導のもとで（むろんジーモンだけということではないのですが）、ハーマン、フンボルト、もちろん、ヘルダーやヴィーコ、古典的な言語哲学者たちの研究にかなり立ち入って取り組んできました。むろん、言語起源の問題も含まれます。ヘーゲルにおける言語の問題もまたじつに興味深いものでした。そして、九〇年代の始めに、ヘーゲルの言語概念にかんする論文を書きました。さらに、こうした仕事を体系化しつつひろい視野のもとに位置づけることをめざし、プラトンやアリストテレスといった古典的テキストの研究にも従事しました。そうして、わたしは、こうした一連の偉大な言語思想家のなかで占めているフィヒテの位置を明らかにしようとしたわけです。

8 メデイウムとしての言語

木村 自然をメデイウムとして解釈することは、フィヒテにおける言語理解とさらなる関係があるようにみうけられます。わたしは、さきに挙げた二つのご論考から、自然と言語にかんする先生のご理解がひじょうに近いものだと感じました。じつさい、先生も、言語をメデイウムとして記述しています。自然にかんする論文でも、自然がメデイウムとして書かれています。ですから、先生の観点からいえば、自然と言語の理解は通底しているように思われます。

ホフマン教授 そのとおりです。わたしの考えでは、言語は、自然のメデイウムとしての特性（中間性）を示すためにも好例となるものです。言語を例として、一方での客観化、他方での中間化という二重の視点を明確にすることができます。われわれの会話を観察している物理学者がいるとします。かれは、当然のことながら、自分が経験したことを、ここのこの部屋で物理学的なカテゴリーによって記述することでしょう。そ

して、周波や音波について語ることでしよう。かれは、たとえば、われわれが語っている周波数を記述することでしょう。あるいは、もしわれわれがなにかを書くならば、かれはいろいろな形式を区別するでしょう。つまり、黒いインクや白い紙を物理的に客観化することでしょう。けれども、かれは、われわれが超越論的なものを問題にしているときに成りたっている、そうした中間性を認識することはまずないでしょう。わたしが語っているとき、物理的なできごとしかないわけではありません。どうじに、知的なできごともあるのです。われわれは、言語をとおして、理解し合います。自然はわれわれにとつてただだんに外界であるだけでなく、超越論的な境界なのです。

言語は、たしかに、客観的なものをもっています。言語を自然対象として考えることができます。人間の言語能力をたんなる自然対象と考えることもまたできます。人間は動物がそうするようにコミュニケーションする、ということもできるでしょう。しかし、その場合、おのずと精神的な面を捨象していることになります。この精神的な面が、そもそも言語が存在する内

的、目的なのです。どうじに、それが言語における中間の、側面です。この点を、わたしは、自分の論文のなかで、主要なものとしたのです。言語のなかにある理性、普遍的なラチオ、あるいはフィヒテのことばでいえば、専心の精神的な自己意識、これが個別化し、受肉し、そして物質的なものにもなるのです。言語の中間性としてのメディアウム、これが大事な点です。

ですから、なにかが第三者において書かれるとすると、それはたんなる客観ではなく、自我性の対象でもあるのです。あなたが指摘くださいましたように、自然概念と言語概念のあいだにはふれあうものがあります。それをわたしもいいたかったのです。ありがとうございます。

9 言語のアンチノミー（二律背反）

木村 つぎの質問は、わたしにとってひじょうに難しいのですが、フィヒテの言語理解の具体的内実にかんするものです。ご論考ではつぎのようなテーゼが記されています。つまり、「普遍的な言語形式は、根本命

題の問いである、すなわち『全知識学の基礎』の根本諸命題の次元において解決されなくてはならない」、「問題は、理念の超越論的な内容と理念の現象における実在的な限定の不和を解消することである」、あるいは、「言語は精神的な力・絶対的生命が有限で現象する諸関係のうちに現出することである」といったように書かれています。こうしたテーゼのそれぞれはとも魅力的ですが、しかし、内容はとても難しいと感ぜられます。ご論考のタイトルは、「フィヒテにおける『全知識学の基礎』と言語の問題」となっています。お聞きしたいのは、言語の問題と全知識学の基礎との関連です。とくに、言語形式ないし言語アンチノミーが知識学の次元にある、とされている点についてです。先生のいわれる言語のアンチノミーが克服されうるとすれば、それはどういう意味においてでしょうか。重要なテーゼだと思いますが、具体的な内容をお聞きしたいと思います。

ホフマン教授　あなたのいわれた諸点を区別して答えることから始めたいと思います。まず、留意しておべき点は、フィヒテ自身が一七九四年の『全知識学

の基礎』において明示的な言語の問題をあつかっているわけではないことです。言語の問題が直接取りあげられるのは、いわゆる『言語起源論論文』（一七九五年）やほかの箇所なのであって、知識学ではありません。『全知識学の基礎』は、われわれの認識の一般的で超越論的な論理を提示しているだけです。その場合でも、しかし、この認識が言語形式における伝達という感性的現象の次元でどのように具体化されるのか、といった問いはありません。いいかえますと、認識がいわば個別的形式のうちにかくに入っていくのか、という問いはありません。ですから、わたしはつぎのよう

にしたいのです。すなわち、一方における一七九四年の知識学の比較的抽象的なコンセプトと他方における『新しい方法による知識学』での個別化の問題とのあいだに固有な対立（緊張関係）がある、ということです。これが第一の留意点です。

第二の留意点は、言語の問題にたいするフィヒテの考え方です。これは、自然の問題と対比できる点です。言語の問題は、いわばしだいにフェードダウンないし否定的になっていきます。いいかえれば、カントとど

うように直接的な主題とみなされなくなっていくます。カントも、注意深く検討すれば分かるように、言語の重要性に気づいており、『人間学』においては言語の問題について興味深い発言をしているにもかかわらず、言語の問題を直接主題とはしませんでした。

第三はつぎの点です。すなわち、フィヒテは、おそらくとも『言語起源論』で、言語がアンチノミーの構造とかかわるといふ事実を意識していた、ということとです。ですから、わたしは、言語哲学の観点から、それを先鋭化しアンチノミーをとまなう体系的問題として定式化しました。そこでわたしが問いとして出したのは、この問題にたいするフィヒテの位置ということとです。わたしの理解では、フィヒテは『言語起源論』で普遍的合理性がいかにして経験的となるかという問題を意識的にあつかっています。つまり、自己において合理的なものがいかにしてどうじにアポステオリな現存であるのか、というアンチノミーです。それを一七九四年の知識学に適用して解決しようとするわたしの試みは、美感的判断にかかわるものです。あるいは、われわれは、言語を芸術の場合とどうように

あつかわなくてはなりません。これはまさに驚きなのですが、普遍的なものがどうじにいかにして個別的なものであるのか、合理的なものがどうじにいかにして個別的な現存をもつのか、という問題です。そのかぎりでのいいたいのは、フィヒテにはその問題を解決する方法がある、ということとです。むろん、わたしは、一七九四年にフィヒテが具体的判断をもって明確なかたちで言語にねらいを定めていたといたいわけではありません。けれども、わたしの考えでは、その問題の解決にはなりえたと思います。

10 第三根本命題と意味の伝達可能性

木村 そうすると、さきほどの「言語は精神的な力・絶対的生命が有限で現象する諸関係のうちに出ることである」というのは、第三根本命題の次元だということになるわけですね。いいかえれば、言語アンチノミーは、経験の世界をあつかう第三根本命題に属し、その次元で解決されるということですね。

ホフマン教授 そのとおりです。言語は、有限性の

面からいえば、像特性をそのまま帯びています。ですから、言語は活動する像です。言語はつねに現象でもあります。いいかえますと、言語は主観客観対立、したがって、可分的な自我と可分的な非我の対立にもとづいています。それが言語の構造です。言語のしくみの全体は、自我と非我の分割構造を描写したものです。しかしそれだけではなく、さらに言語は理性の現在化でもあります。したがって、言語にはつねに絶対的なものもまた現れているのです。そのかぎり、有限なものとは絶対的なものとのアンチノミーがあります。たしかに、フイヒテは、後期では絶対者を純粹にあるいは絶対的に考察していますから、絶対者の矛盾は主題となりません。しかし、わたしがいたいのはつぎの点です。すなわち、われわれにとつて、言語は論理空間の環境における絶対者のこうした現前をもっている、ということなのです。この論理空間は、分割によって特徴づけられるものです。いいかえれば、意味論との関係において特徴づけられるものです。

わたしがさきほどいった普遍的な言語形式という問題は、ふたたび根本命題の論理に関係してきます。言

語は論理的側面をもっていますから、議論を意味論に限定するほうが賢明でしょう。そのようにしてこそつぎのようないいうるでしょう。すなわち、辞書に載っているものは、遂行される語が意味内容をもつかぎり、有限性の領域に属し、したがって、第三根本命題の影響下にある、と。しかしながら、われわれは、意味することの純粹な根拠を知的にありありと思いきすことができるとでなければ、したがって、もしわれわれが理性を駆使できるのでなければ、どんな言語的な意味をも構成することはできません。理性自身がこうした有限な意味論の源泉なのです。あるいは、言語アンチノミーの問題との関連でいえば、拠り所なのです。つまり、言語がそれによって有限性を乗り越えていく拠り所なのです。ですから、言語は、無限に形像されたものにほかなりません。たとえば、言語相互間の翻訳可能性は、言語の合理的な根拠にだけもとづきます。合理的根拠は経験的な意味論や文法のかなたに根ざしているものですが、意味論の次元はわれわれの立脚点に帰着します。

木村 しかしながら、難しいところですので確認の

ためお聞きしますが、たとえばヘーゲル哲学を想定すれば、「われわれにとつて」と「それ自体」あるいは「われわれにとつて」と「絶対者」のあいだには超えることのできない溝はありません。すくなくとも、ヘーゲルは、「同一性と非同一次性の同一性」という意味での同一性を強調します。しかし、フィヒテではそうではありません。フィヒテは有限なわれわれと絶対者とは区別あるいは両者のあいだの距離・間隙をつねに考えています。先生が「われわれにとつて」といわれたとき、われわれにとつてという次元の内部ですでに絶対者の理念をいっしょに考えていわれたのでしょうか。

ホフマン教授 たしかに、それはいま即答するのがとても難しい問題です。ここでは、『言語起源論論文』の以下の点を考えていただきたいのです。フィヒテが再構成するところでは、文法的な形式の成立、したがって当然のことながら有限な意味の発生を再構成することが問題となります。ですから、フィヒテは、ある種の文法を与えようと試みます。つまり、動詞的な意味から、それが指示するものが引き出されて、名詞となるというわけです。けれども、そこで構成されるも

のは、われわれにとつて意味するものでしかありません。つまり、合理的でそれ自体としてある意味論が問題になっているのではなく、語る者にとつてつまりわれわれにとつての意味論が問題となっているのです。けれども、その人間がコミュニケーション状況について語るとすると、そうした経験におけるコミュニケーションは、もともと背景にある絶対者の光のなかではじめてみいだされるものです。したがって、経験的な言語を語る者は、理性的存在者にほかなりません。これがポイントです。理性的存在者がいわば経験的な材料を使つて、(あるいはわたしのことばでいえば)メデイウムとしての自然のなかに入っていく、理性的であることを止めることなくして自然に没頭する、ということなのです。このようにして、語られる意味をわがものとし、意味の伝達が可能となります。

11 個別性とその無化

木村 先生は、自然的存在としての人間と理性的存在としての人間とを媒介する機能を言語にみえています。

その点で、言語の、いつそのメデイウムとしての役割が強調されています。さらに、像的でないものを像的なものの恒常的な連関のなかに取りこむ点を、言語の本質的特徴としています。すなわち、「神の像」を形成するはたらきです。そうすると、言語は、感性的なものを超感性的なものをも媒介することになります。こうした点をふまえて、先生は、さきほどの言語アンチノミーの解決を、言語による理性の個別化にみています。その分、おのずと、言語を担う個性が焦点化されてくるわけですが、しかし、それにとどまることなく、さらに、個性の無化をも強調されています。この点はじつに興味深いところですが、どうじに難しいところでもあります。たとえば、さきほどふれた『動物磁気療法にかんする日誌』は、フィヒテの自然論であるだけでなく、言語論でもあるといえますが、そのなかでも個性の無化がいわれていました。こうした経緯もふくめて、ご説明いただければ嬉しく思います。

ホフマン教授　ずいぶん難しい課題を課せられました（笑い）。ご指摘のように、わたしは、言語の問題を

個別化の、しかも理性の個別化の問題として捉えています。わたしがわたしであるのは、もっぱらわたしが個別であるかぎりでのことです。ですから、自我性と個性との同一性こそ、言語の超越論的可能性の根拠にほかなりません。『ドイツ国民に告ぐ』を援用して言えば、「根源的生命」が現象する生命のなかに入り込み、神に由来する「精神的生命」が現象の真ん中にあることがみだされるのは、ほかならぬ言語によつてです。いいかえれば、普遍的な精神的力がみずから個別化するのには言語をとおしてのことです。そのかぎり、意味の全体性と意味の分離化の合致としての言語は、個性のエレメントにおいて、みずから現出するといえます。しかし、このことは、個性の側からいえば、ある超えがたい溝があることを示してもいます。この溝は、個性にある種の否定を求めます。それが、「純粹にみずからを捧げ、自分の活動を純粹に無化する」とです。しかし、それによつて虚無になるのではありません。個性は、かえって、みずからの意味をこうした自己破棄をとおしてみいだすことができます。すなわち、個性こそ、純粹な自由が具体的現象へ現

出する焦点だということです。

木村 最後はやはり難しい議論でしたが、つぎの点は理解できました。すなわち、後期フィヒテにおいて自我の相対化が強調されてくること、いまご説明された個性の無化の問題とが繋がってくることで、そして、そうした個別的自我の放棄をくぐり抜けることをとおして、自我を超えたものをもそういうものとして示しうる可能性が広がること、です。

本日は、お忙しいなか、長時間にわたるインタビューにおつきあいいただきありがとうございます。先生のごじつに興味深いお話にたいしこころより御礼申し上げます。

ホフマン教授 いえ、わたしこそ、緊張感のある議論をすることができ感謝しております。ありがとうございます。

(二〇〇六年八月 於ボン大学)

注

(1) Hoffmann, T. S., >> eine besondere Weise sich

selbst zu erblicken << : Zum systematischen Status

der Natur nach Fichte, in : Fichte-Studien Bd. 24,

Amsterdam - New York, NY 2003. Hoffmann, T. S.,

Die Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre und

das Problem der Sprache bei Fichte, in : Fichte-

Studien Bd. 10, Amsterdam - Atlanta, GA 1997.

(2) Lauth, R., Die transzendente Naturlehre Fichtes

nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre,

Hamburg 1984.

(3) Kimura, Hiroshi, Sehen und Sagen : Das Sehen

sieht das Aussagen seines Grundes, in : Fichte-

Studien Bd.20, Amsterdam - New York, NY 2003.

(4) Johann Friedrich Blumenbach 一七五二—一八

四〇年、ドイツの動物学者。一七八一年に『形

成衝動と生殖行為について (Über den

Bildungstrieb und das Zeugungsgeschäft)』を著した。